

青年期におけるアタッチメント対象の移行と心理的適応

房宗 苑果
(発達心理学研究室)

問題

Bowlby のアタッチメント理論は、人が特定の他者と強い情緒的絆を形成する傾向を概念化したものである(Bowlby, 1977)。子どもにとってその特定の他者とは、ほとんどの場合養育者である。どのような養育者であれ、その関係が切れてしまえば子どもの生存や健全な発達には保証されないため、子どもは養育者に応じて関係のスタイルを調整しなければならない(Bowlby; 数井・遠藤, 2005)。その中で、子どもの養育者とのアタッチメント関係が、安定したものではなく不安定なものになる場合もある。親とのアタッチメント関係の安定性は子どもだけでなく青年・成人の適応にとっても重要であり、その不安定さは自尊心の低さ(中尾・加藤, 2004)、抑うつの高さ(古村・村上・戸田, 2016)、孤独感の高さ(丹羽, 2005)などと関連することが示されている。

青年期になると、仲間(友人、恋人)との間にもアタッチメント関係が形成されるようになる。Bowlby(1969)は、多くの青年は両親に強いアタッチメントを示すと同時に、他の人物に対しても強いアタッチメントを持つことができると想定していた。これについて最初の実証研究を行った Hazan & Zeifman (1994)は、アタッチメント機能を果たす対象の移行プロセスを検討した。その結果、青年期後期においても依然として親が主要な機能を果たしていた一方で、親とのアタッチメント関係が不安定な場合には、主要な機能を青年期後期に仲間へ移行する傾向がみられた。つまり、親とのアタッチメント関係が不安定であることがより早期における仲間へのアタッチメント対象の移行をもたらすと考えられる(Hazan & Zeifman, 1994)。

親とのアタッチメント関係が不安定な青年は不適応的である傾向が示されているが、アタッチメント対象を仲間へ移行することは適応にどのような影響をもたらすのだろうか。Pitman & Scharfe (2010)は、大学生においてアタッチメント対象が親か仲間かによって身体的・精神的苦痛に差は無いことを示したが、仲間を選択した群は概して親とのアタッチメント関係が不安定であったことから、親とのアタッチメント関係が不安定な人は、

仲間への移行によって不適応を緩和していた可能性がある。しかし、この研究では明らかでない。

そこで本研究は、親とのアタッチメント関係が不安定な群において、アタッチメント対象を仲間へ移行している青年はそうでない青年より適応的であるという仮説を検討することを目的とする。また、アタッチメント対象を測定する尺度の日本語版を作成することも目的とする。

方法

参加者 大学生 472 名(男性 206 名、女性 254 名、不明 12 名、平均年齢 20.34 歳、 $SD=1.28$)

質問紙の構成 ①アタッチメント対象: Important People Interview (Rosenthal & Kobak, 2010)の日本語版を作成し用いた。Attachment Bond, Support-Seeking Behavior, Affiliation の 3 因子、9 項目。②アタッチメント関係の安定性: Experience in Close Relationships-Relationship Structure (ECR-RS: Fraley, Heffernan, Vicary, Brumbaugh, 2011) の日本語版(古村ら, 2016)。回避と不安の 2 因子、36 項目、7 件法。③抑うつ: Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D Scale: Radloff, 1977) の日本語版(島・鹿野・北村・浅井, 1985)。20 項目、4 件法。④自尊心: Rosenberg (1965) の自尊心尺度の日本語版 (Mimura & Griffiths, 2007)。10 項目、4 件法。⑤フェイスシート (参加者、参加者の母親、父親、配偶者および恋人の情報)。

結果

親に対するアタッチメントスタイルとアタッチメント対象の移行の関連 ECR-RS の母親と父親に対する回避・不安得点を平均したものを親に対する回避・不安得点とし、どちらも平均値以上である安定群とそれ以外の不安定群に群分けした。IPI の Attachment Bond 因子において最も高得点であった対象を各参加者の第 1 のアタッチメント対象とし、第 1 のアタッチメント対象が母親、父親である群を非移行群、恋人、友人である群を移行群とした。親に対するアタッチメントスタイル(安定、不安定)とアタッチメント対象の移行の有無(非移行、移行)のクロス表で χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2=6.439, df=1, p<.05$)。残差分析の結果、親に対するアタッチメントスタイルの安定

群は、アタッチメント対象が非移行である傾向があり、不安定群は移行している傾向があった。

親に対するアタッチメントスタイルとアタッチメント対象の移行の有無による、適応の差異 親に対するアタッチメントスタイル(安定, 不安定)と、アタッチメント対象の移行の有無(非移行, 移行)によって、“安定・非移行群”(n=105)、“安定・移行群”(n=51)、“不安定・非移行群”(n=116)、“不安定・移行群”(n=98)の4つに群分けを行った。群ごとの抑うつ・自尊心得点の差異を検討するため分散分析を行ったところ、どちらも主効果が有意であった($F(3, 353)=9.518, p<.01$, $F(3, 359)=11.299, p<.01$)。多重比較を行った結果、“安定・非移行群”と“安定・移行群”は、“不安定・非移行群”と“不安定・移行群”よりも抑うつ得点が低く、自尊心得点が高かった。しかし、“不安定・非移行群”と“不安定・移行群”の間に有意な差は見られず、仮説は支持されなかった。

アタッチメント対象を移行している青年における、親・第1のアタッチメント対象に対するアタッチメントスタイルによる適応の差異 アタッチメント対象を仲間へ移行している青年に焦点を当て、第1のアタッチメント対象である仲間に対するアタッチメントスタイルも含めた分析を行った。第1のアタッチメント対象が恋人の場合はECR-RSの恋人の得点を、友人の場合は最も親しい友人の得点を用いて、平均値によって安定群と不安定群に群分けした。親と第1のアタッチメント対象に対するアタッチメントスタイルの組み合わせによって、どちらも安定の“両者安定群”(n=30)、親のみ安定の“親安定群”(n=21)、第1のアタッチメント対象のみ安定の“仲間安定群”(n=32)、どちらも不安定の“両者不安定群”(n=66)に群分けを行った。群ごとの抑うつ・自尊心得点の差異を検討するため分散分析を行ったところ、どちらも主効果が有意であった($F(3, 143)=11.412, p<.01$, $F(3, 142)=9.038, p<.01$)。多重比較を行った結果、“両者不安定群”は他の3群よりも抑うつ得点が高く、自尊心得点が低かった。

アタッチメント対象を移行していない青年における、親・友人に対するアタッチメントスタイルによる適応の差異 アタッチメント対象を移行していない青年に焦点を当て、最も親しい友人に対するアタッチメントスタイルも含めた分析を行った。親と、最も親しい友人に対するアタッチメン

トスタイルの組み合わせによって、先ほどと同様に“両者安定群”(n=55)、“親安定群”(n=49)、“友人安定群”(n=22)、“両者不安定群”(n=92)に群分けを行った。群ごとの抑うつ・自尊心得点の差異を検討するため分散分析を行ったところ、どちらも主効果が有意であった($F(3, 204)=6.113, p<.01$, $F(3, 211)=6.528, p<.01$)。多重比較を行った結果、“両者不安定群”は、“両者安定群”と“親安定群”よりも抑うつ得点が高く、自尊心得点が低かった。

考察

親に対するアタッチメントスタイルが不安定な青年において、アタッチメント対象を移行していない“不安定・非移行群”と移行している“不安定・移行群”の適応には差異がみられず、仮説は支持されなかった。この結果から、親とのアタッチメント関係が不安定な青年にとって、アタッチメント対象を仲間へ移行することだけでは不適応は緩和されないと考えられる。

そこで、まずアタッチメント対象を仲間へ移行している青年に焦点を当て、親と第1のアタッチメント対象に対するアタッチメントスタイルによって群分けを行い適応の差異を検討したところ、“両者不安定群”が、“仲間安定群”を含む他の3群より不適応的であった。この結果から、親に対するアタッチメントスタイルが不安定であっても、アタッチメント対象を仲間へ移行し、その仲間と安定したアタッチメント関係を形成できれば、青年の不適応が緩和されることが示唆された。

さらに、アタッチメント対象を仲間へ移行していない青年に焦点を当て、親と、最も親しい友人に対するアタッチメントスタイルによって群分けを行い適応の差異を検討したところ、“両者不安定群”が“両者安定群”と“親安定群”より不適応的であった。その一方で“友人安定群”と他の群との差異は有意でなかったことから、親とのアタッチメント関係が不安定な青年は、最も親しい友人と安定したアタッチメント関係を形成できていない場合は適応的であるとは言えないことが示唆された。しかし、“友人安定群”などのサンプル数が少なかったため、より大きなサンプルを用いて、親とのアタッチメント関係が不安定な青年における、アタッチメント対象の仲間への移行の有無と、仲間とのアタッチメント関係の安定性について、適応との関連を詳細に検討することが望まれる。